

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈母へのおもいに関する作文〉

小学生高学年の部 優秀賞

一生けん命なプレーのそのそばに

旭丘小学校五年 下島 弘聖

しもじま

こうせい

受賞の言葉

今は、新人戦に向けて練習にはげんでいます。プレーがうまくなるのはもちろん、課題であったつながるための声かけができるように練習しています。一事が万事と母はよく言いますが、最近では自分のやる全てのことは、一つの夢に通じているという気がします。いろんな経験を積み重ね、力にしていきます。

ぼくのお母さんは、おこるとこわいけど、まわりのふんい気をもり上げてくれるそん在です。ぼくは、サッカーをしているのですが、お母さんはほかの友達のお母さんとちがって、ぼくががんばっているのをわざわざ暑い所で応えんしてくれます。それも大きな声をはりあげて。その声は、プレー中にもよく聞こえる熱い応えんです。どうして暑い所で応えんしてくれるのか聞くと、ぼくが炎天下でプレーしているので、そのしんどさを一しよに感じ、そのしんどさを知って言葉をかけたいからだと思います。

お母さんが一生けん命応えんしてくれるのには、もう一つわけがあります。それは、お母さんは、中学校までバレーボールをしていました。しかし、高校生の時にバレーボールがしなかったのに、親の反対と進学のためにバレーボールができませんでした。自分の意思を押し通すことができず、バレーボールをあきらめてしまったのです。お母さんにはまだそのくやしさがあるのだと思います。お母さんは、スポーツのできなかつたことを後かいしていたのです。お母さんはこんなこともよく言います。「やった後かいよりも、やらない後悔をするな。」まさに、母の経験から出た言葉です。そんな経験をしたからこそ「サッカーがしたい。」と言ったぼくにサッカーをさせてくれたのだと思います。ぼくが後かいをしないように、あの時あはしたかつたという思いをしないために。サッカーする条けんとして、「宿題を必ずすること」「いろんな大変なことをサッカーのせいにはしないこと」「ひどくても続ける」ということを約束しました。その約束はちゃんと守っています。

しかし、試合でつかれてダラダラしていると「ゆるい気持ちですな。」と言われます。そう言われて、ぼくは「ちゃんとやっているのに。」と思ってしまうって、ちょっといやな気持ちになります。でも、その言葉でぼくは「見返してやる」という気持ちが強くなります。気持ちをふるいたたせぼくは、全力で相手にぶつかっていきます。

ぼくがサッカーを始めたのは、四年生の半ばです。それまでなかなか

習わせてくれませんでした。その理由の一つは、幼いころからせんそくだったからです。走るとせきが出ます。息がしずらくてとてもつらいです。そんなぼくのことをよく知っているお母さんが、ぼくにサッカーを習わせるということは、大きな決断だったと思います。今、発作もなく元気にサッカーができるまでになってぼくは心からうれいいます。

ぼくは、サッカーが大好きです。でも、それは、家族のみんながぼくを支えてくれるからです。いいプレーをした時には喜び、ミスをした時には、はげましてくれまます。そんな時は、心からうれいいます。土、日のサッカーの試合では毎回、毎回来てもらっています。大切な休みをつぶしています。でも、お母さんをはじめ、お父さんも弟も文句一つ言いません。お母さんは試合前に「思いきり汚れてこい。」と言います。そして「体をはってゴールを守ってこい。」とも言います。ぼくは試合前はみんなちようでドキドキします。口もカラカラになるほどです。でも、お母さんやお父さんや弟の姿を見ると思いきり相手に向かうことができまます。ぼくの家族はぼくを支えてくれる応えん団です。家族のためにも、ぼくはもう少し自分にきびしくなって、自分のことは自分でできるようになりたいです。そしてサッカーがもつとうまくなりなりたいです。そしていつか、今度はぼくが家族を、支えられるようになりたいです。